だけだ。分かることと実行することが一致して初めてリサイクルの成果は上がる。幼稚園で折り紙を使う時、お弁当を食べる時、園児は消費者である。園児の親も消費者である。園児とその親を賢い消費者に育てることができたらと願っている。

（お茶の水女子大学附属小学校）

『愛の妖精』と『銀の匙』

渡辺　純一

子どものころの夏休みのうれしさはたとえようがない。日中のうだるような暑さと朝夕の涼しさが独特のリズムを作っていた。朝は学校に通うときよりも早起きして涼しいうちに宿題をすませる。日が高くなるととても勉強どころではない。近所の桜並木に蝉取りにでかけたり、炎天下新設の市民プールに歩いて通った。夜は蚊帳を吊ってその中に寝た。

和机に参考書を積み上げ問題集に取り組んでいる

と、時々庭に面したガラス窓から風が入ってきて開けっ放なしの家の中を吹き抜けていく。外には庭木の葉のつややかな緑が陽に輝いていた。母が一冊の本を渡してくれたのはそんな夏休みのことだった。パラフィン紙のカバーに赤色の帯がついた岩波文庫で、フランスの女流作家ジョルジュ・サンドの小説『愛の妖精』であった。『トムソーヤの冒険』や『宝島』に夢中になっていた小学六年生にとってはずいぶん気恥ずかしい題名で、母の意図がはかりかねたが、読みはじめるとたちまちひきこまれてしまった。

【フランス中部の農村地帯ベリー州を背景に、野生の少女ファデットが恋にみちびかれて真の女へと変貌をとげていく。ふたごの兄弟との愛の葛藤を配した心憎いばかりにこまやかな恋愛描写はこれをサンド（一八〇四－一八七六）の田園小説のうちで屈指の秀作としている。主人公は少女時代の作者自身をモデルにしたものだという。】現在出版されている同書の表紙には前記の解説が印刷されている。

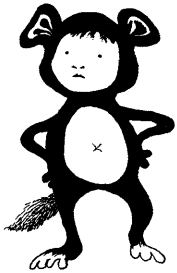
働き者のバルボーにさずかった玉のような一卵性双生児の兄弟はいつもいっしょに育てられ気持ちのいいほどよく育った。気だても実におとなしくおだやかだったが、やがて二人はそれぞれ違った運命が授けられ、まるで違った人間だということがわかったのだった。一方、めぐまれない境遇に育った貧しいヒロインは、あだなが「こおろぎ」、目の大きなところだけが自分でも気に入っている色の黒い器量の悪い女の子。しかし、弟のランディーに恋した心のやさしい少女は、持ち前の知恵を発揮してかれの心を捕まえる。心ないうわさ話が広がると、静かに街を離れて身を隠す。やがて医術を学んで戻ってきた彼女は美しく変身し、おばあさんが残した遺産のおかげで突然豊かになってめでたくランディーと結ばれる。嫉妬深い兄は初めは弟の愛情をめぐって彼

女と争うのだが、後には彼女の聡明さに惹かれて愛するようになる。そして……。

サンドが本書の構想を得て執筆したのは、パリコミューンが民衆側の惨敗に終わった一八四八年、黒船が浦賀にくる五年前のことである。宮崎嶺雄による邦訳が岩波文庫から出版されたのは、昭和十一年。もし、その時に母が読んでいれば同じ年頃だったはずである。すっかり読書に夢中になって勉強がおろそかになった私の様子に驚いたのか、母はその後しばらく何も言わなかった。

『銀の匙』は友人に教えられて読んだ。彼が通う関西の進学校では中学一年生の国語の教科書になっているという。作者中勘助は明治十八年東京は神田の生まれ。岐阜今尾藩士であった父勘弥が明治維新後も家令として勤めていた藩邸に生まれ、四歳で小石川区に引っ越した。生来虚弱で生まれるとまもなく大変な腫物で、毎日まっ黒な煉薬と烏犀角を飲ませられた。そのとき子どもの小さな口へ薬をすくいいれるのに伯母さんがわざわざがしてきてくれたのが「銀の匙」であった。

作者は信心篤い伯母さんの背中におぶわれて神田川のふちのお稲荷さんにお詣りしたり、伝馬町の牢屋あとのお皿のある怪しげな河童の見せ物や、駝鳥と人間の相撲を見たりして大きくなっていった。迷信家の伯母さんは、毎年お盆に閻魔様のお寺につれていった。線香の煙がむんむんとこもっているなかでぎゃんぎゃんぎゃんぎゃんひっきりなしに鉦をならす。そこで閻魔様と三途の川のお婆さんを見せるのであった。ひとみしりの強い子どもであった作者のために一生懸命遊び仲間をさがし、お向こうのお国さ



んという女の子が見つかると、蓮華の花ひらいたを家で根気よく教えて下稽古をやらせ、それが立派にできるようになったら遊びの輪に加わらせた。かくれんぼするときお国さんは、「昨日裏の藪から三目小僧がでた」などとおどかしてから竹藪に隠れたので、恐くなって捜せなくなった。彼女の父親の仕事の都合で遠方にこしていったあと、おけいちゃんが引っ越してきた。勝ち気で人なれた子で、ぼんやりな同級生に対してとかく女王のようにふるまう気味があったが、学校からかえると復習予習もそこそこに裏畑で石蹴りや縄跳び、鞠つきに熱中した。あやとり、うつしえ。おさななじみの思い出はうらやましく、帰らぬ昔が思われる。

伯母さんの親身な世話のおかげで次第に人ともうちとけるようになった作者は、小学校ではやさしい先生たちの教えを受けて、鋭い批判精神を育んでいった。

修身の授業で孝行を百万遍も繰り返されるのを聞いて、「なぜ孝行をしなければならないのか？」と問いかける作者に対し、新任の丑田先生は、最も下等な意味での功利的な説明を加えるよりほか能がなく、しまいにはかっとして「孝行のわかる人手をあげて」と命令した。そして「ひょっとこめらは、われこそといわないばかりにぱっと一斉に手をあげた」のであった。作者の批判は日清戦争中の熱狂した愛国心にも向けられた。「日本人に大和魂があれば支那人には支那魂があるでしょう」。

修身が道徳に変わってからも、ひょっとこめらははびこる一方で、学校では「いじめ」が横行している。作者はその背景に先生の陰険な生徒操縦法のあることを見抜いていた。教師がその後もこの有効な手段を用いて常にひとの質問を鎖そうとしたので、彼はまたその屈辱を免れるために修身のある日にはいつも学校を休むようになった。それでいて、大好

きな中沢先生には家の庭の棕櫚の枝で鞭を作って進呈し、「頭をたたくにはこれがいちばんだ」と言われて喜んでいるのであった。

ふたりの先生の違いは一体なんだろうか。生徒を自分より劣ったものとして高圧的態度で接するか、一個の独立した人格と認めて対等に接するか、の違いではないか。子ども時代の丑田先生は、親から頭ごなしに孝行を強要され、口答えなど許されなかったのだろう。

人間関係は人に生まれつきそなわった能力ではなく対人環境の中で次第に成長していくものであるから、物心つく頃にやさしいひとたちに取り囲まれているか、あるいは、子どもの個性を認めようとしない大人に取り囲まれているかの違いによって、よくもなり悪くもなっていく。対等の人間関係を結ぶことのできない「権威主義者」のもとではいつでも同じ状況が生じるであろう。いまや、小学校から大学までであまりにもありふれた風景になってしまった「いじめ」のルーツはこのあたりにあるのではないだろうか。幼児期のこころの教育の影響はじつに大きいと思われる。

ひとびとの暮らしぶりは国によってまた時代によってさまざまに変わっていくけれども、子どもたちの思い出がいつも幸せに満ちたものであるように願わずにはいられない。

（東京大学医科学研究所）